



911. 368-W27ウ
1200500756419

911,368
W27



始



911.368

W.27



若月紫蘭著

春の影

日大堂書店刊



著者寄贈本

984

94

序

三千年の昔からの望成らんとして、日本は今極東の一小島國から、大東亞の大指導者となり、世界の最大勢力の一となりつゝある。大日の風土は濶帯から熱帯にまで擴がりつゝある。俳句は今や平板纖弱なる小さな叙景詩から、雄大な叙景詩、幽遠な叙事詩、新鮮でもあり、悲痛でもある抒情詩にまでその領域を擴めるべき時である。燃ゆるが如き愛國の熱情、極りなき護國の忠誠、壯烈鬼神を泣かしむる空海陸將士の偉勳、之等の現實的精神美は、芭蕉の尊皇の至誠、一茶の愛國の情熱と等しく、俳句の詩材として光輝を發すべき時である。悲痛なる人事美、壯烈なる戰爭美も亦、自然美と等しく、文學として俳句としての分野を占む

京都府立総合資料館蔵



べきである。今や大日本民族の魂は、新なる俳句精神の下に、新なる文學美を求めて驀進すべきである。囚はれた心の眼を開き直して、新なる美の故郷を探求すべきである。

この意味に於て、私は筑波會の一員たりし頃から後に作れる五千餘句の中から、最近の僅かを抜いて、私のすがぬけの紀念とすべく集めたのがこの句集である。

丁度今私は俳味の變遷推移の跡をたづね終つて、つく／＼と芭蕉の生活態度に心を打たれ、彼の精神と人格の偉大さに魅せられ、彼の俳句の雄渾にして幽寂なるに今更の如く驚歎し、自らのあまりにも小さく、あまりにも醜きに恥死すべきを思つて已まざるものがある。この意味からはこの一冊はわが小さな墳墓で

もあるのである。

願れば私達が山口高等學校にて、佐々醒露先生主宰の下に高風會を設けて俳句を作り出したのは、明治三十一二年頃だつた。東京に出ると私は筑波會に入會して、當時の名士先輩たちに散々もまれたものだ。

大學を出てからは、暫く俳句を遠ざかつてゐたが、昭和二三年頃から又俳句に興味をもち出し、昭和六年には、大野酒竹沼波瓊音等先輩の歿後は、姿も形もなくなつてゐた筑波會を、今度は私が主となつて、臨風博士等と共に再興したが、それも間もなく宮島五丈原の死と共に、又やめてしまつた。近年江戸時代文學に關はることゝなつて、一層俳句に興味を深め、遂に俳味の變遷も論ずるまでになつてしまつた。これが私の俳歴の告白である。

かうした浅薄なる経歴の持主であるからには、二三の俳諧研究に名を列ねられてゐることは、むしろ不可思議でもあり、恥かしさの限りである。本當をいへば恥死すべきである。

實をいふと、嘗て極めて少数の「紫蘭句集」なるものを作つたことはあるが、それが改めて堂々と句集を天下に送らうとするのは、全く生れ代らんがための一つの手段に過ぎないのである。

昭和十八年三月二日

紫 蘭 識

目 次

大東亞戦集	一七一
瀬の音	一六六
近江八景	一六六
京から大和	一八〇
聖戦集(昭和十六、七年)	一
春の雨	四
夏の日	一四
秋の風	四〇



聖戰集 (昭和十六、七年)

三千年の歴史新たに初日影
白人の夢覺して明るし太平洋

衣更東亞十億の民に風薫る

二十六句集	初氷集 (明治三十三年頃)	落花集 (昭和三年四月)	春曉集 (昭和五年四月)	芝居	入院	旅 (二六〇〇年)	殘雪
.....
乙	女						
.....
	一五	一四〇	三五	二	八九	八四	六三
							四九

燃ゆる陽や敵の巨艦の沈む夕

死んでゆく軍馬守つて霜に泣く

戦友の死屍抱いて異郷の月に泣く

戦やんで馬と語るや月の陣

入城の喇叭や武漢の朝の秋

陥落の朝や鷄鳴霜に牙ゆ

配給の米一粒つつや雪に寝る

まどろむや砲聲遠し弦月に

初戦戦死の報の到る朝

春の雨

元日の門に出て我家見たりけり
全世界に響けと打込むや初太鼓
天地新なり二千六百年の初太鼓

元日や去年のままのおれが顔
人も山河も蘇へる見ゆ初日出
初日出昨夕のままの我身かな
初詣下駄のきしみの新しき
初詣賽銭の響高らかに

人人人の波にもまれて年暮るる

羽根つくや白衣の勇士ほがらかに

新なる世界生れけり初太鼓

向合つて笑ふこともなき炬燵かな(老夫婦)

隣には鶏鳴いて雪解す

六

門は閉ぢて柿の木に月が凍つてる

正月や人笑つて我も笑ひけり

豆撒くや福頬冠りして逃げてゆく

節分や兩隣盛んに豆を撒く

死にそこねて還暦祝ふや紀元節

二年分の餅つくや二千六百年

鼻があるかと觸つて見たり零下五度

文樂の櫓燦たり初淨瑠璃(古親大夫の紋下を祝ふ)

8

親子三番の踊りづかれや初芝居(猿之助父子)

節分や鬼が豆撒く家もあらん

春立つや雪達磨が辻に笑ひつつ

嘯みつげは蟲齒にしみる焼けた薯

春雨や熱下りて粥をすする朝

9

落つる陽に花閉ぢかかると福壽草

猫の戀やうやく静まりて春の雨

窓あけて病床に春光を浴びる朝

筆とれは墨に春色ほの光る

掌を打ては春の音して雨がふる

隣には春が来たよな笑かな

尻馬に乗つて蛇悠々と町に入る

馬市や蛇馬の尻から尻に飛ぶ

蛇飛ぶや馬腹鼓打つあたり

やせ馬に蛇喰ついで日の永き

又しては蛇飛んで来て暮れかぬる

春晝や鶏卵を産んで静なる屋敷

春晝や太鼓打出す本門寺

春晝や鳩豆をくれと下りて来る

永き日や清正の頭に鳩糞す(本門寺の銅像)

團扇太鼓の音に日永し本門寺

蘆の芽の白く光つて暮かぬる

蘆の芽の日に日にのびて日の永き

孫だきに草餅もつて京に入る

かいつぶり乱れ飛んで若葉にたそがるる
13

かなかなの頻りに鳴いて暮れなづむ

花を見ぬ花見行列の乱舞かな

草餅の香をなつかしむ楊枝かな

雛の首引ぬき合ふて喧嘩かな

アドバルーンだらりと垂れて暮れ遅き

面とれば鬼によう似た花見かな

永き日や象にお辭儀をさせてゐる

ゆく春や財布に残る五錢玉

卒業を棒にふつて玉の輿に乗る

卒業の日に振袖が出来て来る

嫁入の日の定まつて卒業す

春めくやどこやらの戸うつ風の音

春めくや雨戸うつ音夜すがらに

春めくや風にがたつく破れ門

春の夜や眞白な手に雨うけて見る

薄日さすや庭石に春の雨ふりて

醉漢の巡査を叱る花見かな

女が女を血眼で口説く花見かな

サーベルも吹出す花見踊かな

窓硝子遂に割れけり春の風

春の野や稽古喇叭の群もゐる

校庭や窓弄ぶ春の風

春休や校庭の櫻満開す

近づけば春燈に灯はなかりけり

人酔ふて春灯の油つきんとす

春灯の消ゆにまかせ語り明しけり

春の夜や人は歸らず灯はきえんとす

見る中に塔となりたる霞かな

ひよつこりと塔の先見ゆ朝霞

永き日や麓に牛の聲かそか

嘘の道教へられけり日の永き

學生の教練見つつ暮れかぬる

春雷や放課の鐘の鳴りひびく

麗かやおんなじ鯉が幾度来る

春雨や高下駄の音に覚えあり

春雨や相合傘行く京の街

拍手の山から山へ霞みけり

朝霧や六根清浄の鈴登る

日輝いてニユースなく年新なり(十六年元旦)

春の夜や知らぬ犬が黙つてついて来る

ぬくさうな話聲する隣かな

麗かや隣の猫も遊びに来る

皮むきかけて戦線偲ぶ林檎かな

隣の主人の戦死傳へて年暮るる

春の日やあくびしつつ試験監督す

春の風嚴罰の掲示だけ残る

白粉の少しほしけれ謝恩會

馬鹿踊見てゐる馬鹿に櫻散る

野中井や底一ばいに春の月

深井戸の釣瓶の音澄む月夜かな

春の夜や物語りつつ橋を又戻る

春の日や忘れた友がたづね来る

何を見つめておはしますやら春の雨

夏の日

あけかけて窓にたたずむ若葉かな

夫婦庭に出て見る朝を牡丹咲く

牡丹咲く朝妻呼びて庭に立つ

垣越しにほめられてゐる牡丹かな

門を入つて暫したたずむ牡丹かな

病床をぬけて見に出る牡丹かな

白牡丹崩るるを一心に見つめけり

巡禮になすみて蠅の廻國す

禪定に入る僧なぶる小蠅かな

兵法を盡して蠅の討たれけり

蠅打つや神経痛の腕痛む

蠶蠅の頬にとまつて所在なき

神経衰弱の眼すはるる青葉かな

片頬のゑくぼが見える團扇かな

音頭とる聲にさびある團扇かな

短夜の川渡りかけて明けにけり

短夜の船島につく汽笛かな

蝙蝠や石碑の文字の読み難き

近づけば庵も見ゆる若葉かな

若葉越しに喧嘩しゐるや隣同士

廣告の目立つて白き青葉かな

鯉はねてお手鳴る音を風薫る

葉櫻や破れぶらんこがきしんでる

(小石川
植物園)

葉櫻や猿ぶらんこに乗つてゐる

空家や庭一ばいの八重櫻

庭下駄の音涼しけれ垣隣

寂しさを求めて若葉の森に入る

衣更へて髻そつて床あげしたりけり

讀經や燈盡きんとして風薫る

讀經半にうたたねの夢を風薫る

短夜の香つぎかけて明けにけり

暑き日や灸の身にしむころよさ

涼しさや灸心魂にしみ渡る

土用灸書見の疲忘れけり

土用灸見る見る五體蘇る

暑き日や灸すえて又ペンを執る

暑き日や書見疲れを灸すゆる

天が下の人煮えてゐる暑さかな

鳴きかけて鶏のやめける暑さかな

試験監督欠伸となりし暑さかな

夜一夜蚊を追ふ隣の戦さかな

蟬の聲も貧乏たらしき我家かな

餓鬼蟬の集つて来る我家かな

啞蟬のだまりこくつてゐる暑さかな

薫風や垣越しにきく笑聲

主待つ間をなつかしむ棕櫚の花（青嵐大臣を訪ふ）

開放つ大臣室や風薫る（青嵐大臣に）

炎天や砂にのたうつ大みみす

炎天や駄馬仆れたる人ばかり

炎天や尻に流るる駄馬の汗

水打つて風鈴釣つて客をまつ

素裸の晝寝の一家や安風鈴

客の来て風鈴を釣りかへさせる

金魚屋のあとから風鈴賣がゆく

風鈴の音に魅せられて門に立つ

風鈴賣貧民窟を素通りす

客去つて風鈴盛んに鳴り出す

風鈴やふとあるかなき風に鳴る

風鈴に留守させてゐる小店かな

風鈴のよく鳴る茶店美人あり

風鈴の残された儘の貸屋かな

風鈴の一日鳴らずしまひけり

五月雨や一山の僧經を讀む

柿の花なつかしむまで住み侘びつ

訪なへば窓から顔出すや柿の花

一郷のよし切鳴いてたそがるる(葛飾)

門前に鮎釣れば來る行々子

灯を消して團扇の音する座敷かな

疊替へて風の涼しき座敷かな

暑き日を食ひつくおでんの熱さかな

向合つて物言はぬ日の暑さかな

鶏の首しめてゐるや青嵐

蓮巻葉とけてどぜうの躍り出づ

螢放つ庭大いなる隣かな

病む人の窓に螢を放ちけり

螢飛んで塔の高さをはかりけり

螢狩はかなき戀を聴く夜かな

螢狩忘れて戀を語りけり

螢みな向ふの岸へ流れ飛ぶ

秋の風

庭隅や咲かすもがなの菊が咲く

艦を下りて菊作りけり老叢作

武蔵野や雲なき空を鳥渡る

垣越しに菊ほめて菊貫ひけり

店先や店番の猫に菊香る

我宿や貧乏菊の途に咲かす

秋雨のふれくと経読み鐘を打つ

颱風や墓の音すみて夜明けたり

颱風や緋睡蓮に夜明けんとす

颱風や池の金魚の静かなる

颱風や千年の古木折れる音

颱風や行衛も知らぬ時の鐘

颱風や鐘樓に上る僧の裸なり

颱風や落柿にいまだ澁残る

新涼の臍に迫つて網を引く

新涼の爪の先から胃にしみる

名月や眼下に廣き太平洋（川奈）

晩秋の傳書鳩亂舞して暮淋し

暮またで曇日を虫の狂ひ鳴く

吾も泣けと虫忍び鳴くや窓近く

強風に流れて遠し蟬の聲

屋上や雲にある如し野分する

大木の幹眞二つに野分する

柿未だ熟れず一日野分する

汽車に寝て寝がての夜の長さかな

蚊の逃げてさする兩手のいたさかな

闇打に蚊を打つて頬のいたさかな

蚊のうなり全身の血を沸かせけり

秋雨や金魚動かすたそがるる

取らぬ狸の皮を敷へる夜長かな

秋の風空家をぬけて通りけり

水涸れて瀧は紅葉に隠れけり

世に出でて羅漢賣られけり年暮

月の坂を大萬燈の上下する(池上)

團扇太鼓が坂のぼりゆく下りゆく

阿呆面が一番うまき踊かな

よく歌ふ頭の光る踊かな

一村の女驅り出す踊かな

出稼きて爺婆ばかりの踊かな

野分する隣はいまだ寐さるらし
(昭和十七年九月)

短夜の香つけば既にあけんとす

残雪

眼鏡われて物光なし冬の朝

吸入の湯氣薄寒く頬を打つ

咳入つて魂消えさうな炬燵かな

秋晴の果はありけり富士の雪

埋火や思ひ出の戀に貰ひ泣く

炭圍くづし崩して戀を語りけり

埋火や因果ふくめて母が泣く

皺だけがふえて今年も暮れんとす

一門の年を數へて年暮るる

鴨をさく暇なく年の暮れにけり

村越えて焚火の煙夕なびく

びくびくと耐も焼かるる焚火かな

一人へり一人へり焚火きえにけり

霜おくや野垂死んだる犬の背に

酔覺や片足の下駄に霜おいて(所見)

とろとろと馬はまどろむ焚火かな

番兵やまびさしに霜の結ぶ頃

鳴り放しの電話もあつて年の暮

初霜や賣られゆく娘の頬赤き

初冬や乗かへて旅の快き(永田鐵道大臣の新任を賀す)

汽車曳いて旅立ち給ふ大臣おとどかな(内閣難行)

狼のあまりに多し江戸の冬(世相二句)

素裸になつて二月の暖き

鉢の梅咲きかけて君病輕し(泉兄を見舞ふ)

熱下りて梅の鉢置換させにけり

咳入つて隣も夜長話かな

コンクリのひびのふとまる寒さかな

鼻先のこはばり痛む寒さかな

あぶ舞ふて小春の一日暮れにけり

大空の青さめでつつ枯野行く

音立てて霜柱とけて午となる

國亡びて案山子の残る枯野かな(蔣介石)

病む夫にさげて歸る柚味噲を雲哉(妻は柚味噲
買つて歸る)

寒ければ體操ばかりする日かな

天が下に美しく見ゆ雪の我が家

吹雪く夜を木魚打ちあかす隣かな

降るほどに飲みあかす雪の隣かな

雪降るやぶつかり合ふて笑ふ傘

雪晴やカナリヤ逃げて屋根に鳴く

大雪や叩きつかれて醫者の門

大雪や櫻田門通る人もなし

残雪のまばゆきを背に鮒を釣る

炭はねて痛のこるや鼻の先

霜解や尋ね廻りし友の家

木枯の吹込む空の財布かな

木枯や娘賣られて村を出づ

鮒釣るや皆物言はず暮れんとす

水の底に赤き鳥居見ゆ鮒を釣る

三代の借着なりけり七五三

百萬の毛孔にしみ入る寒さかな

裏町やよごれ達磨が消えのこる

残雪の小さたなき達磨面やせて

大道に撒くや残んのどろ達磨

枯野ゆく凱旋勇士無言なる

年越すや夜店から夜店あさりつつ

退屈な行く年まつや大晦日

行く年の銀に羽ある銀座かな

門札の新になつて年暮るる（友を訪ふ）

行く年の吾が歳數へて笑ひけり

紙幣を読む音ばちばちと年暮るる（銀行所見）

紙幣讀むや眼を血走らせて年の暮

旅

トラツクの埃あみつつ村の梅遠し
(久地の梅四旬)

62

自轉車の女の多し梅の村

梅百本花には早く人いやし

梅咲かず園子の價の貴さかな

人とへば人あらず梅が咲いてゐる
(水戸の梅五旬)

梅咲くや虫干の賣物見せてゐる

63

梅に早く杖曳く人は皆老いて

慨世の遺士あり梅の碑を語る

梅園や尊農のおもちや賣つてゐる

五千頁の書成つてこの日櫻咲く(二千六百年
四月七日)

ぐみ熟れて庭隅少し明るかり(六月六日)

麥踏むや黙りこくつた老夫婦(東北旅行)

麥踏むや背の子いまだ泣止まず

畑打つや赤ん坊は猫と眠つてる

民貧しく寺大いなり村の冬

島を縫うて漁船と鴨と並びけり(松島)

紅梅や山櫻や僧門を出つ(南禪寺)

永き日や鳩が駱駝の背に乗つて(京都動物園)

いばりする駱駝見てゐる日永かな

垣越しに鶴戦ふや暖き

白鳥の首をならべて春の雨

山雀の静かに鳴いて延暦寺

三井寺や鐘撞かんとして僧月に立つ

浮御堂見つけ出したリ夕朧

晝ながら月夜に似たり京の春

春の水小唄をのせて流れけり(大川端)

日本一の馬鹿となつてまだ捨かな

公曉さがす千年の銀杏の若葉かな(鎌倉)

時宗の顔見つめるや日の永き(鎌倉寶物館)

日本一の芍薬見つつパンかぢる(大船)

鉢植の柿花咲きぬ落ちにけり

知らぬ間に蘭咲きゐたり忘れ鉢

分福茶釜の正體見たり日の永き(館林)

薫風や狸のおもちやならぶ店

百日紅の炎えて朝霧晴れかかる(信州別所)

温泉の町の暮るともなく明けにけり

蕎麥食つて國なつかしむ信濃かな(善光寺)

雷に追はれて坂駈け下る夫婦かな(荊萱堂)
(四句)

見下ろせは人間の世の暑さかな

夕立や不戴天の敵に廻り合ふ

帽とれば涼しき汗の流れけり

琉球の踊見る都の暑さかな (映畫)

蛾の群の障子打つ音更けにけり (富士山麓)

夕涼み富士も暫く素裸に

刻々に姿變りて富士涼し

不信者の山のぼりゆく暑さかな (大山詣
三句)

左右から休んで行けと呼ぶ聲暑き

手を洗つて詣でよと叱る聲暑き

雲の上に蟬の聲あり杉木立(井の頭池)

涼しさや鯉はねて池静かなり

水澄んで月に浮く鯉影涼し

涼しさや遊鯉亂舞の描く線

涼しさや白粉の顔の見えぬ町(尾州西尾)

涼しさや闇の中ゆく尼二人

長谷寺や涼しく下る五百段(大和長谷寺)

漱石の墓白く早春の陽の光る(難司ヶ谷墓地)

檜の蔭にヘルンの碑あり春寒き

萩寺の萩散りて寺の新しき(萩寺)

石牛の鼻飲けてあり冬に入る（龜戸天神）

死に龜のボカンと浮いて秋暑し

名物の葛餅さげて天満宮を出づ

狂人の舞の手やさし秋日和（龜戸天満宮所見）

初なりの柿もぎられて日暮れけり（友の子を失ふに三旬）

咲きかけの大輪の菊折られけり

武藏野に移り住んで泣く夜の多からん

小春日や城壁の石を目で計る（大阪城）

大輪の菊壇にあげて輝けり（友人泉君藍綬章を賜る）

首かへて仇討に出る人形かな（人形芝居）

涼しさや人形が太夫を笑つてる

千疊に藤の雨降る光かな(牛島の藤)

行々子黙せる我を笑ふかな

行々子水を隔てて討論す

南無大師三千の牡丹散らんとす(西新井)

五百年の晩鐘きくや秋の暮(相州金澤稱名寺)

一景は眼をとちて聽け秋の暮

秋日和猿なぶりゐる水兵隊(九覽亭)

崖路やあぶなき芙蓉咲き残る

濱に干す海草の香やベルリの碑

久里濱や砂上に残る破れ雪隠

秋山や鶯笛が谷下る(高尾山)

關八州は霧の中なり高尾山

腹買ふ人だかりかも秋の山

消え残る線香に秋の雨ほそき(多磨墓地)

もえ残る線香に火ともす彼岸かな

墓地守に叔父の墓きく彼岸かな

大原やバスにあぶなき崖紅葉

山を下る烏帽子に遇ふや大原道

眞白な鯉一つ浮くや寂光院

美しき尼泣き合ふて夜の長き

尼さんの微笑寂し秋の暮

尼さんの白き齒寒し寂光院

兩岸に歌は流れて稻を刈る

拍手の遙かなり霧の鞍馬山

鞍馬路や日は短きをつづらをり

賣トや四條橋畔柳散る

静けさや國寶に向ふ朝の秋（醍醐寺）

車またせて茶園子つまむや秋の暮（宇治）

六甲や時雨れて廻る峰のバス

鐘つけば秋暮れんとす嵐山

鳶舞ふや愛宕より高きこと一丈

撃拆や秋雨静かに南禪寺

秋雨や僧一人歸る夕の南禪寺

島原や妓婦の客呼ぶ聲寒し

花魁の影法師とゆく月夜かな

清水や紅葉に早き汁粉茶屋

鼻の先ちと時雨れけり京の町

橋立や三つの子に股のぞきさせてゐる

橋立や醜き女股のぞく

秋立つや妾の髪を切る噂

入院

入院や水ものまなく冬籠る

シヤボテンの今一日を咲き返る(死線突破)

これからは餘計ものなりおらが春(蘇生の朝)

地階には讀經もあつて夜の長き

病室や見る見る花の山人の海(見舞の人多し)

病室や花にうもれて蘇る(花を贈らる)

草花にうもれて病むや春二月

一碗の重湯にこもる二月かな

友の死を病床にきく二月かな

病後の襟にうそ寒く花散りかかる

蘭の花日日色あせて病衰ふる

氷碎く音絶え間なき夜ぞ長き

窓にうつる影静かなり霞む朝

爪切るや病床に二月の陽の柔ら

室外は春の笑や病みこもる

胃を病んで卵黄を嚙むや冬籠

パン嚙むや蘇りたる春の第一朝

病窓や明け残る月になづむ春

はらわたを見られてゐるや春寒き(レントゲン)

命貰つて娑婆へ歸るや春の風

質物の痛消えて日本晴の桃節句

霞晴れて質物の痛消えにけり

白酒はバリウムなりける節句かな

芝居

二月、吉右衛門の佐倉義民傳を再び見る、三句

命かけて禁制のとら纜雪に切る

降る雪を一世と二世の別れかな

捕はれて訴状ささぐる紅葉かな

孫を殺せと母に迫る陣屋の夜や長き(先陣館)

腹切れと孫口説く祖母や秋の夜

死ねといふ謎解く孫や蟲の聲

身替や雪の吉野にぬぐ鑑(吉野忠信)

雪に立つ緋絨は偽の義經かな

五月雨や大望の堀の水計る(丸橋忠彌)

身替の娘を刺すや夕月夜(神靈矢口渡)

月の出や生捕放つ大太鼓

月の出や流矢のとぶ舟の中

月の夜やとんとろ踊る親子獅子(連獅子)

春 曉 集(自昭和五年
至昭和九年四月)

風引くや炬燵を抱いておらが春

横町の羽子の音曲つて霞みけり

足少しはみ出して寒き布團かな

へその孔ほじくつて見るや小春縁

土蜂の尻あぶりをるや小春縁

小春縁に脳味噌とけて寝たりけり

小春の陽欠伸になつてしまひけり

雲の如き偉人の群れて花見かな

すれ違ふ自動車と自動車や汗一斗

幸運の手紙ショーから来るや春の暮

赤電車欠伸をのせて年暮るゝ

笑ひかけて欠伸となりぬ赤電車

蕨のうたた寝の鼻先徘徊す

勿體ぶつた琵琶歌をきく暑さかな

雷鳴や階下に女の大笑

鮎つりの釣なげて崖に晝寝かな

初汐や峨眉山に月落ちかかる
(大毎に求められ
た室積潤の二句)

行く秋や俊寛の遺跡語る僧

瓜かぢりかぢりつかれて寝る子かな
(朝鮮
三句)

96

白衣重ねて汗ともならぬ暑さかな

皇居半ばこぼたれて京城の秋深き

神苑や砂利ふむ音の良寒き
(明治神宮祭)

霜にふむ曉の砂利すがくし

森の上に既に月あり晝花火

見る顔も馬鹿と見ゆべし馬鹿踊

年賀状の後から死亡通知かな

97

暑き日や腹すいて物云ふ力なき

空腹の蚊を逐ふ力なかりけり

切西瓜欲しさうに見る暑さかな

氷食ふ人見て通る暑さかな

飢えて泣く子等の泣聲に秋暑し

六疊一間に十人寝てる暑さかな

仕事にあぶれ夏の雨見て一日動かざり

帯しめ直して空腹を忍ぶ暑さかな

駄馬のキンから汗のしたたる暑さかな

三味の音のよごれて暑き芝居かな(宮戸座)

營門や美人立ち居て風涼し

將軍の脾肉嘆して晝寝かな

大の字に我家關白の晝寝かな

敢然と本を枕の晝寝かな

全身融けて汗となるらん暑さかな

團扇太鼓の音の近づく暑さかな（小湊四句）

太平洋の波音きいて晝寝かな

團扇太鼓に引かれて闇を寺に入る

日蓮像の鼻筋白し鳩の糞

郵便にどなられて起きる晝寝かな

湯豆腐の咽にやけつく暑さかな

空腹のうなり物凄き寒さかな

物干におしめならんで春の風

一寸までおらが帽子ぞ春の風

うららかや女夫ちんどんや町に入る

パンく〜とお手鳴る方へ返え返る

若き尼の窓しめにけり猫の戀

猫の戀お巡りさんがにこ〜と

減俸の教員會議やむし暑き

飲食兒童十五萬人梅雨に入る

梅雨十日命に徴が生へんとす

梅雨晴や去年の夏帽出して見る

梅干を食つてコレラこいと力みけり

梅雨晴や今宵の月のでかいこと

梅雨の日や新聞の碁を打つて見る

夏帽にかびこつてりと五月雨るる

単衣物に羽織引かけて五月雨るる

梅雨七日骨の髄まで腐らんす

螢籠抱いてその儘寝たりけり

睡蓮の今年も咲かず秋に入る

全日本五右衛門になる暑さかな

汗たら／＼碁にまけてゐる暑さかな

死んだ石がひよつこり生きて風涼し

西瓜切る西瓜切るとて客をまつ

腹鼓打つて西瓜と比べけり

不愉快な廣告ばかりの避暑地かな

納涼會ビールの廣告ばかりかな

自動車衝突間髪を入れて汗一斗

つゆ晴やお手植松の大手術(目黒不動)

羅漢寺や羅漢の背に洩る晝の月

足もとから雲の峰立つ高尾山(高尾山に上る)

氷かむや眼下に關東十二州

安芝居子供ばかりの暑さかな(小芝居)

物賣の聲暑くるしき幕間かな

松茸や孫だきにゆく爺が顔

松茸や財布の銀貨讀んで見る

獨り居の冷飯かちる夜寒かな

移り住みて門松たてぬこと十年

頭から正月の來る娘かな

島田鬻未だ成らず年明けんとす

百八の鐘止みて煩惱まだ去らず

元日や煩惱の鬼又戻り来る

東京や隣から年賀のはがき来る

元日や雀に稗を撒いてやる

三ヶ日を門しめて獨り本を読む

軒並に貸屋札はげて冬に入る
知らぬ町にふと友と遇ふ冬立つ日

チンドン屋黙つて行くや秋暮るる

紙芝居の太鼓淋しく秋暮るる

雪の夜や法度の舟の綱を切る (佐倉義民傳劇一場)

去り状前にあかぬ夫婦の歎きかな(二場)

江戸行きの旅はなさぬ子供かな

人動く度に雪降る芝居かな(三場)

そり橋に大名ならぶ紅葉かな

一切経裂いて行法呪ひけり(四場)

ぼんぶりに酒呼ぶ秋の廣間かな(六場)

大名の亡靈になやむや大廣間

花咲いて紙屑公園となりにけり(上野)

舞ひ狂ふ落花の中の喧嘩かな(小金井所見)

小金井や水を隔てて喧嘩行く

水をはさんで喧嘩も花も流れゆく

だまりこくつて一人花火を見てゐたり

室一杯に晝寝してゐるや獨者

つかれた眼を生暖かき風打つ電車

命懸けで碁にまけてゐる暑さかな

肝癪玉を煮えくり返さす藪蚊かな

獨居れば淋しかろとて蟲が鳴く

四隣の時計別々に鳴るや夜半の秋

五位鶯のたつた一聲に秋が立つ

この月に豈に鳴かさらんやと蟋蟀

燈火を消して虫きく月夜かな

秋立つや白髪が馬鹿に目に立ちて

洗ひ髪隣からわが頬なぶる暑さ(電車)

月出んとしてほんのり白き蓮花かな

盛粧の扇子忘れた暑さかな

稻刈るや母娘二人に歌もなく

名月や犬つれて散歩に出る男

名月の夜を通して踊りけり

體ぢうの血が沸きたぎる暑さかな

窓しめてトンネル通る暑さかな

寝不足の眼に曉の風薫る

この暑い日を痲癩玉が煮え返る

痲癩玉にぎりつぶして涼みかな

戸をさして名月の夜を籠りけり

さらでだに淋しきものを晝の蟲

名月の車窓にならぶ頭かな

名月や乞食なりやこそ夜もすがら

酒のまぬ我に秋刀魚あり今日の月

名月や下手な義太夫が通りゆく

賣れ残りて花屋の萩の散らんとす

女郎花つんとしたるがわりなけれ

栗の茶屋松茸のちりも候ぞ

小春日や試験場の外は鬼ごっこ

菊作りとなつて老將軍の名聞えけり

碁にまけて五十年の秋願る

何處やらに釘打つ音す寒き夕

落葉ふみ落葉ふみて友の門に入る

皺を見合ふて友と笑ふや秋の暮

元日や一年一度の客が来る

元日や死んだ子の年數へつつ

思ひ出せぬ女名前の賀状かな

初湯出てのんびり爪つむ日向かな

長閑さや新聞のない一月二日

元日や何も見ることなき新聞

元日や同じ新聞二度も見る

髯でもそれと元日の妻の小言かな

寝過して雑煮は餅にかへりけり

床の中に賀状見てゐるや犬の春

氷割れど金魚動かぬ寒さかな

近づけば乞食なりける臍かな

朧夜を知らぬ女の會釋かな

長閑さやゴム風船が飛んで来る

長閑さや山の眞晝の鋸の音

新宿や人地に溢れて風寒き

土左衛門の檢視をするや春の月

落花集

(自昭和三年
至昭和五年四月)

春が行くぞとおれが鼻先花の散る

窓あけておやくと隣の花見かな

戀猫のうなりつつづけて明けにけり

落選や春宵の屁に力なき

獨り子の亡靈つれて花見かな

命がけの屋根から落ちぬ猫の戀

暑き日や近所の赤ん坊合唱す

赤ん坊人口政策を高唱す

萬物の靈長様の屁に秋の行く

武藏野や馬の屁に秋のたそがるる

見てる中にいつか踊つてゐたりけり

コリヤさと鉢巻の坊主よく踊る

あけ放つ清涼殿の涼みかな

東京灣のこの涼風を一手かな

朝顔一輪隣でふらり咲きにけり

夕立の聲だけかけて通りけり

寝られぬままに蚤と二人で月見かな

秋は物の淋しきものよ古帽子

マント物云はす十有五年の別れかな

ペンにおいて夜長の鐘を數へけり

黙として吾によう似た海鼠かな

この冬は海鼠となつて炬達かな

殿様もそこどけ松茸のちりちやぞよ

帝展は散歩によろし秋日和

脳味噌の煮えくり返る暑さかな

煤煙の顔に飛び着く暑さかな

二代の忠をぬきんづる夏帽子

西瓜食つて腹鼓打つ裸かな

うなるやうにお経きこえ来る暑さ

蟬鳴くや讀經の聲仄かなる

この暑さ逃げてしまへと讀經かな

松茸のちり今日は我家の關白ぞ

豆腐屋の親爺待て松茸を買つたぞよ

時雨るるや大將の柩車門を出づ

總理大臣の菊花に埋まる柩車かな

大政黨の總裁埋む日を時雨る(叔父逝く)

時雨る夜や亡き叔父の活動寫眞見る

夜通しの白挽歌ひつかれたり

賽錢のちやらんことりと時雨れけり

この秋や秋刀魚味なく米安し

柿一箱贈られて妻の笑顔かな

生神様にやおら奉る柿二つ

飯よりも先づ柿を召す笑顔かな

雪降るや隣に酒を呼ぶ聲す

雪ちらく豆腐屋の喇叭往來す

犬牽けば犬の群れ來る夜寒かな

雪五寸足駄七たび江りけり

娑婆に飽きて紅蘭買つて歸りけり

鑿の音高らに鳴りて雪の降る

福引の樂隊やみて月が出る

プロ街や劍劇の子等に雪が降る

食ふ程にむくほどに皮の蜜柑山

一切空と悟れども飯はうまいかな

手の皺なでて四十八年をかへり見る

我と我が咳にきき入るや置炬燵

三つばんや彌次馬の下駄の音冴ゆる

すわ一大事背中を蚤めがかけ廻る

寝ぼけ目に星乱れ落つ霜の朝

焼く薯のほのかにほふ炬燵かな

煮え豆腐悠然としてのんど下るかな

誰か来たよな音がして雪落つる

大聲門を叩いて雪の夜を友來る

外してはかけかけつ夜長の検温器

一人居の屁を友として冬籠

菲くさき支那町出でて風薫る（支那行）

鼻をつまんで支那町出るや夕暑き

鼻をつまんで夜店をあさる涼みかな

菲くさき浴衣にすれ合ふ小路かな

菲くさき風の暑さよ支那の町

支那に来て體も汗も菲くさき

路ばたや瓜を喰ふ人ひさぐ人

一望千里高粱畑豆畑

高粱と月ばかりなり大満洲

貧乏神早く出てゆけ除夜の鐘

家出の従妹寒さうに歸るや大晦日

初 氷 集 (自明治三十三年
至昭和二年頃)

初鴉神泉苑の彼方より

初鴉八百八町明けんとす

初鴉打込む神鼓第一聲

大いなる羽子板だいていね給ふ

元日や老いたる妻の美しき

屠蘇に酔うて猿引猿に引かれけり

輪飾や水手洗の大蛇水はかす

輪飾の小さきがかかる仁王かな

輪飾の取り残されし貸屋かな

輪飾の揃ふて太し遊女町

一村の娘鞠つく學校かな

春の夜や煎じ薬の沸える音

公達の烏帽子忘れて春の宵

寄せ鍋に顔のぞけたり春の月

臘月三味の主じは男かな

口あけて淡雪なめし蛭かな

春雨や傘一本の駄菓子店

こぼち居る壁の匂や春の雨

畑打つやズボンを穿いた豫備士官

箱庭や土筆ん坊主屹立す

病室のみな首だして日の永き

見せ物の虎のゐねむる日永かな

摘草のつい鬼ゴツコとなりけり

戀猫の睨み合ひけり鬼瓦

花一山紫の幕うたす豪華かな

欠伸して見送る雁の別れかな

二階から見送る雁の別れかな

貝殻のきらくとして春の川

加茂川や友禪さらす春の雨

春の雨筏に乗つて歌下る

春雨や風癪院のしんとして

春の雨垣を隔てて話かな

鐘の音の雨より細し春の夜

徒らに狂女笑ふて春の風

春の風馬の尻尾に狂ひけり

肴屋や向鉢卷春の風

狎だいて佇む門の日永かな

狎などをなぶつておはす日永かな

月朧吾が名を呼びし人や誰れ

春なれや忘れし人を思ひ出す

親猫の我子を戀ふる勢まほかな

路問へば廓なまりや朧月

つばくらや一直線に色町を

春の夜や石ければ石の薄光る

春の川眞白な石の光りけり

永き日や石切る山の音うらら

戀猫の人を恐れぬ日向かな

睨み合うて戀ともならぬ小猫かな

吾が家の臙に見ゆる月夜かな

永き日や隣りの鸚鵡よく語る

臙月横町にそれた頬冠

白魚の頭を残しておはします

春は物の人の頭も光るかな

耕すや親父の頭かげらふて

耕すや大いなる日を背に負ふ

藤咲いて主は美人の噂さかな

噴水の届かんとして藤の花

塔高し若葉の上の二日月

嫁が来て新しき蚊帳つらせけり

蚊柱や裸のやうな人の影

五月雨や築地崩れて栗の花

つきかけて時鳥きく鐘樓かな

青鷺の行衛見送る二階かな

桐の花夕日に富士を見つけたり

鐘の音に角收めけり蝸牛

乗かへて人なき電車風薫る

短夜を其儘寝たる草鞋かな

青嵐千石船に帆をあげて

繪日傘の川渡りゆく夕日かな

啞蟬の従容として鶏に食はれけり

丘の上の勢を視よ初轍

風鈴の鳴らんとしては止みにけり

行々子論する國の境かな

心太沈みもあへぬ清水かな

小男の大きくなつて晝寝かな

夕立や都大路の人騒ぎ

夕立や駄馬が糞する渡し舟

霧はれて見上ぐる山の小寺かな

稻妻に見つけだしたる案山子かな

繪のやうな霧の中行く電車かな

古琴を取りいだしけり萩の雨

葡萄つむ美人にあたる夕日かな

思ひ出の砧に更けし夜長かな

佐渡やかなた鯨子を呼ぶ星月夜

頬かむりとらせて見たき踊かな

終列車乗り後れたる夜寒かな

山雀やしんかんとして雨の寺

稻刈るや石橋山を背にして(箱根から修善寺)

吾が父に似たるどてらの案山子かな

朝寒の谷にとどろくくさめかな

箱根路や眼に見えぬ鳥の渡る聲

雲悠悠眼下全山紅葉して

見かへれば紅葉の茶屋は雲にあり

雲静に流れて紅葉もえんとす

白雲の間に間にもゆる紅葉かな

白雲や瀧は紅葉にせかれつつ

満山の紅葉ちれよとくさめかな

紅葉折るべからず瀧へ五六町

雲の帯絶えて紅葉のもゆる哉

地獄谷から極楽へつづく紅葉哉

一山の紅葉のもえて雲を吐く

駕籠かきの紅葉見よとて煙草かな

駕籠かきは雲の上行く紅葉かな

自動車の雲に入りける紅葉かな

凝乎として秋の雨きく温泉かな

郵便の傘ばかり見ゆる薄かな

電柱の三尺高き薄かな

兵を呼ぶ喇叭や秋の行かんとす

富士の雪手にとれさうな薄かな

月も泣け松も夜を泣く暮の秋(夜泣松)

朝寒の温泉に入れば五體蘇る

行く秋を渡鳥の羽薄光る

客去りて火鉢一つの廣間かな

寄鍋の音ちりくと時雨れけり

残月の落ちて結ぶや初氷(山高時代の句)

手洗へは雁來にけらし初氷

猿引の猿に教ふる榻火かな

雪とつて薬のんだる苦味かな

大雪や開け放ちたる營所門

賣卜の眞赤な嘘を吹雪かな

餅搗や女ばかりのかしましき

二十六句集

乙 女

向岸の舞子の手ぶりや月の京(京の宿にて)

かも川の向の笑ひや月今宵

大悲閣抹茶茶碗に紅葉散る(嵐山にて)

もみじ緋に水青々と水車（大原にて）

石がきに菊眞盛や三千院

しぶ柿のふみつぶされてゐる野道かな

大原や花嫁かざす菊の花

とつぐ子をもてなす母や雛祭り（お節句に親戚にまねかれて）

とつぐ子を並べて見るや雛まつり

子を持たぬ親の心や雛祭

招かれて昔なつかし桃節句

白粉の皺深みけり明けの春

雪だるまこしらへつつもだるまかな

殘雪に梅花一輪見つけたり

雪の日や餌をさがしに来る馳

春曉や鏡の中に光る皺

毛皮着て扇つかふ女や春淺き

早春や忘れられたる置炬燵

春立つや日向にさする手の甲に

一人来て人の子と花に遊びけり(日比谷)

大公望を見てゐる袖や櫻散る

首をちぢめて藤の下ゆく女かな(牛島)

盛装の並んで立つや藤の花

夫の放送きく夜やいまだ春寒き（二月廿六日）

天高く馬は肥えたれわれやせて

春の雨繪にありさうな女ゆく

大東亞戦集（昭和十七、八年）

元旦や三千年の望今こゝに（昭和十八年）

元旦や最敬禮にまた死を誓ふ

元旦や大東亞の地圖ぬりかへて

戦線を思ふ雑煮に涙煮ゆ

米奴の夢微塵に碎く師走かな(十二月八日)

神兵天下つて地に風薫る(パレンバン)

春なれや英奴の牙城落つつぎぐに

涼しさや救國の聖雄斷食す

鹵獲機や秋晴の都縦横に

はらくと病馬の尻に落葉かな

戦士弔ふ町蕭條と時雨れけり

水に映る杉の影寒くゆれやます

朝霧や橋渡る倒影うすれつゝ

元日や門松も行く人もなき（昭和十八年元旦の緊張）

老妻一人子を失つて淋しく羽根をつく、聞くに堪へず

妻ひとり黙つて羽根をついてゐる

老妻や一人羽根つく家の内

黙々と戦馬斃れて秋の風

梅散る日憶ひ出の像に涙沸く（津好夫人逝く）

小原烏兎翁より隨筆「草をむしる」を贈られて

峠茶屋むしられた草の香なつかしむ

冬の陽を背に壁の影静かなり

冬日向縁に炭火の影ゆるゝ

瀬の音

涼しさや南へ萬里日章旗（川治温泉にて）

雫と立つて電車の中の暑さかな

汗ふくや互に皺を笑ひつゝ

鮎詰になつて鮎食ふ電車かな

赤嘘の涼しく見ゆる都かな

赤嘘をうまくつかれて涼しけれ

碧潭や逆さに浴衣の帯赤き

瀬の音の魂にしみ入る夜や涼し

乗換へて涼しき汽車の上りかな

近江八景

驕傲の將軍の碑や秋の風(義仲寺)

こほろぎの聲細々と朝の庭(芭蕉の碑)

寂しさや碑の蔭に晝のきりくす

その昔打出の濱や秋の風

名月や紫式部筆おいて(石山寺)

鐘遂に撞けども鳴らず秋の風

長橋は霧に隠れて消えにけり(勢田橋長橋にあらず)

霧の中に松の影見えて走りけり
(バス唐崎の松を走る)

金色の千體佛や月上る(浮見堂)

湖の水より暮れて秋寒し(琵琶湖)

京から大和

手に掬めば魂も冷ゆるや御袂川(上加茂)

花散つて人の影なき若葉かな(京都植物園)

散り残る牡丹あぶなき微風かな

下加茂や巫女は暑げに緋の袴

朧夜や狸も鬼も躍るべし(東寺)

宿とれば若葉のあひに五重塔（奈良）

青嵐千年の杉静かなり

行く春や千年の燈つきかへて

行く春や千年の壁畫影薄く（法隆寺）

末世なれやもんべ姿の紅葉狩（龍田川）

閑かさや松の落葉の落つる音（神武天皇御陵）

雲の峯割つて日に映ゆる祠かな（淡山神社）

遁世の日を思ひ出す月夜かな（長谷観音にて西行を）

涼しさや石段下ること五百

静かさや千年の礎石に春の雨（西大寺）

昭和十八年七月五日 印刷
昭和十八年七月十日 發行

定價貳圓
送料十四錢

著者 若月保治

東京市神田區三崎町二ノ三四

發行者 中島豐吉

東京市小石川區丸山町一一

印刷者 有澤宅次

發行所

東京市神田區三崎町二ノ三四
日大堂書店

(東京1448)

984
94

終

